

Title	『歴史的なるもの』の本質
Sub Title	
Author	川合, 貞一(Kawai, Teiichi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1937
Jtitle	哲學 No.18 (1937. 8) ,p.1- 72
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000018-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『歴史的なるもの』の本質

川 合 貞 一

近世に於ける自然科学の勃興は『歴史的なるもの』の把握の上にも非常な影響を與へたのであるが、かのベルンハイムは現在に於ける歴史觀の主潮を論ずるに當つて、唯物論的歴史觀なるものを挙げ、第十七紀以來、當時行はれた哲學の思想、自然科學、政治上社會上の觀念が相結合して、自然的因果の一體たる關聯といふ姿で世界を認識しようとする努力したものとなし、これには二つの主潮が區別さるべしとした。即ち、一つはダアウインの生物學上の進化論と國家、社會に於ける人類の發展に適用する生物的唯物論的歴史觀と、今一つは、マルクスこれを創め、エンゲルス、ラファルグ、ベエベル、カウツキイ等によつて更に展開された經濟的唯物論的歴史觀

であるとなしてゐるのであるが、然し自然科学的精神の影響は、唯、さういふ歴史觀に於いて認められるだけではなくして、歴史を以て所謂科學たらしめようといふ努力の行はれるところには何處に於いても、やはり自然科学的精神の影響の尠なからず存することが看取されるのである。

ペルンハイムの如きは史學の概念及び任務を論じて、歴史を以て科學であるとすると言つてゐるのであるが、それは、ある一定の事實領域を因果關聯をつけて認識しなければならぬものとするところからである。蓋し渠の考へるところでは、因果認識なるものは、純粹科學の要求であつて、史學もこれを要求する。然し因果認識は諸自然科学に於いて行はれるその一つの仕方だけに限ぎられはしない。即ち、個々の事象、現象は規則的に回歸し、常に同様に決定され、且、豫め決定され得る一般的諸原因の結果であると認識することだけに限られるものではない。かういふ認識で足るのはある領域の個々の事象や現象相互に如何なる差別があるかゞ問題であるのではなくして、それ等のもの、平均的、規則的存在や様態を決定する法別が問題である場合に限ぎられる。例へば水晶の形狀は六面體に結晶する

ことによつて決定されるといふ場合のやうなのがそれである。この際個々の標本が大きいか小さいか、その形が完全か壊れてゐるかは、鑛物學者にとつては問題にはならないのである。又別の例をとれば地球の各公轉には、疑もなくそれ〴〵何か特異な點があるに相違ないが、ある公轉が他のそれとどう違ふかは天文學者の關しないところである。然しある領域の諸現象の差別、特殊な點、一度限り生ずること、などいふ點が正しく研究關心の對象である場合には、かういふ考察方法では十分でない。例へば發展、即ち、諸現象の連續して而も相違してゆく變化の有様を認識しようとする歴史の領域に於けるやうなのがそれである。

一體、歴史の對象は人の活動であり、而して人が外的原因によつてだけではなく、内的原因によつても、意識、即ち、知情意の内的反動及び衝動によつても、決定されることは、與へられた根本事實として人の精神的物理的本性の然らしめるところである。實にさういふ内的なるものの力によつて、人は目的を定めて活動するのである。これ等の内的原因は精神的因果關係に屬してゐる。而して歴史に於いて特に大切なのは、この種の因果認識である。といふのは、外部の物質的諸原因であ

つても、多くは人の意識に入り込み精神的動機となることによつて始めて作用するからである。精神的因果關係は、その根柢に於いて普遍的自然必然性に基づくこと物質的のそれには勿論劣らないし、又、普遍的法則を同様に有してゐないのでもない。が、その領域の諸現象を説明する方法が違つてゐるのである。即ち、問題の現象を説明するのに、その原因があれば、それはいつでも同様に決定され、且、前以て決定され得る結果であると進行的に説明せずして、個々の場合の特殊な事情の下に起つた結果であり、而してそれがさういふ風に起つた後にその原因が決定され得るやうな結果であると退行的に説明するのである。人の本性が普遍的に同じであることだけでは、我々が丁度個々の場合の相違に關心を有する限りそれ等の場合を推論し得るには不十分である。人の本性が同じであるといふことは類推推理を許すだけであるが、この推理は、解釋の重要な補助手段として役にはたつ。而もこの事は、人物の個々の生活に於ける諸現象に就いても、また大衆の全生活に於けるそれに就いても、同様にあてはまる。即ち、後者も亦、バツクル其他が空想するやうに、普遍的諸法則から、例へば統計的に推論し、計算し、前以て決定され得るも

のではない。いかにも民族生活に於いては、どこでも或る全體氣分、状態、制度、觀照がある。これ等のものは、當時生活する個人によつてある程度まで受動的に受け容れられ、殆ど自然關係のやうに少しも變化せずに行はれる。けれども實はこれ等のものは、これに關與する個人の側からして繼續的攝取と適用とが行はれることによつてのみ、存在し維持されるのである。かういふ爲方は諸自然關係とは全く異つてゐる。それ等のものに對する個人の關與と、その逆にそれ等のものが個人に與へる影響とは、個人の身分、職業、天稟などによつて、その時々でいろ／＼異ふ。個人そのものは勿論發展の經過の中に斷えず變化し、これらの變化に伴つて全體事情も變化する。それはいかにも人人に氣づかれないこともあらうが、然し往々甚だ顯著に、且、急激に起つてくることもある。それで普遍的法則を發見し、それから個々の現象の實際の相違を顧みないやうな認識を得ることは、集團現象を取扱ふ限りに於いても史學の職能ではあり得ない。さういふのは、實際いろ／＼の相違がその領域内に入る處に存在はしてゐても、その相違に對して何らの本質的關心を有しない諸科學の任務たり得るだけである。例へば多くは自然科學の領域に

於けるが如き即ちそれである。然るに史學の領域をなす人間の諸活動は、まさしくそれ等の間の相違やそれ等の發展の特色ある點が興味を惹くのであるから、人もし歴史内容の本質的なるものを無視することによつて歴史を科學に引き上げべきであるとなし、恰かも自然法則的考察方法に歴史内容の本質を把握する能力のないのがその長所であり、その故に自然科學の方法で取扱ふべき、若くば取扱はれると思はれる對象だけに歴史認識の内容を限るべきもののやうに考へるならば、それは奇異な概念不明確の致すところである。集團状態や集團運動を取扱つたからとて眞の史學であるのではない。個人や個々の事件に就いて物語つたからとて非科學的な歴史であるのではない。かういふ人間兩様の活動が相離るべからざる、且、同等の認識客體となつて居る一個の統一的な歴史科學があるだけである。要するに、個性的單獨なものの行爲と集團活動とは不可離的に結合されて居る。後者は個々の活動から成り、前者は集團活動を根柢となし、集團と個人とはどこまでも交互作用の關係に立つて居るのである、と主張して居るのであるが、ベルンハイムが、實證論的史觀や唯物史觀に反對して、歴史の關心の懸るところは、普

遍的因果關聯に在るのではなくして、個々の事象や現象相互間の差別にある。即ち、歴史の對象は普遍ではなくして特殊であるとしてゐるところは正しい。けれども、渠が歴史を以て、『協同體をなす存在としていろ／＼活動する人間の空間的時間的發展の諸事實を、その時々々の協同體から見た價值に關係さした心理的物質的因果關聯に就いて究明し、且、叙述する學』であるとなして、自然科學に於けると同じやうに、因果關聯を覓めるものとなしてゐるのは、よし、因果關聯なるものに、原因があればいつでも結果があると進行的に決定される場合と、個々の特殊な事情の下に起つた事象(結果)の起つた後にその原因の退行的に決定される場合との異がある、而して前者が自然科學的因果關聯であり、後者が歴史的因果關聯であるとなしてその間に一應の區別を立て、ゝゐるものの、歴史に於いてもやはり因果關聯を覓めるものに他ならない、而して、歴史に於いて因果關聯を覓めるといふことは、歴史をば自然科學的に解するといふことであつて、歴史をあるがまゝに把握するものとは言へない。さういふところから見ると、ベルンハイムの如きもやはり自然科學的精神の支配を遁れることが出来なかつたものと言はなくてはならぬ。

ベルンハイムの歴史の方法論に關する見解は近時の我が史學の上にも尠からざる影響を與へたもののやうに思はれるのであるが、それを以て見ても、近來の歴史が如何に自然科學化されて來てゐるか、察せられるであらう。眞の歴史から如何に遠ざかつて來てゐるか、察せられるであらう。

1' Bernheim, Einleitung in die Geschichtswissenschaft. S. 16—57

二

歴史に於いて普遍的法則を覓めようとするやうな極端な考へ方は別としても、所謂科學としての歴史に於いては個別的な特殊の事件の間に因果關聯を覓めなければならぬものとするのが、近時の史學に於ける一般の傾向であると言つていゝ。然るにかういふ歴史觀に對して最初に反對の聲を揚げたのがシヨオペンハウアであるといふことが出来る。渠は言ふ

科學といふものは、數へることの出来る多數のものを分類して、これを種概念の下に集め、種概念をばまた類概念の下に集め、かくして普遍と特殊とを認識

する途を拓くのである。而してその認識たるや、個々に就いて考察されないにしても、すべてものに當嵌まるのであるから、無限の特殊を包括する譯である。あらゆる科學は、相並んで各その範圍に屬する對象を研究するのであるが、哲學なるものは、科學の準備したところのものに解決を與へる、最も普遍的な、又、最も重要な智識としてその上に位するものである。

ところで、歴史なるものは本來その仲間に入るべきものではない。といふのは、歴史は科學の誇りとしてゐるやうな利益を有することが出来ないからである。惟ふに歴史なるものは、認知された對象をば從屬の關係に置くものではなくして、單にこれを並置するだけのものであるから、科學たる根本性質が缺けてゐるからである。それで、如何なる科學に於いても、系統なるものが存して居る譯であるが、歴史にはそれが無い。随つて歴史は智識ではあるが科學ではない。歴史は決して個々のものをば普遍によつて認識するものではなくして、個々のものをば直接に把握しなければならぬものである。かくて、謂はゞ經驗の大地を這はなければならぬのである。

然るに眞の科學なるものは、それ以上に出で、個々のものを支配するだけではなく、少くともある範圍内に於いてはその事象の可能を豫見するところの、包括的な概念を得るのである。一體、科學なるものは體系であるからして、その談るところは、常に類に就いてゝあるけれども、歴史なるものはさうではなくして、個に就いてゝある。それで歴史なるものは科學となることの出来ないものである。といふのは、個の科學といふやうなことは矛盾であるからである。

それからまた、科學なるものは、概念の體系であるところから、その談るところは、不變に存するところのものに就いてゝある。けれども、歴史なるものは、一回限りのものに關するところのものである。その上、歴史なるものは、その性質上、聲すとの出来ない個々單獨なるものを取扱ふのであるから、歴史の知るところは、すべてたゞ不完全なもの、半端なものたるに過ぎない。それで歴史は日の改まる毎に、いつもこれまで知られなかつた所のものを教へなければならぬのである。かういふと人或は歴史に於いても特殊なものを普遍の下に従屬させることが行はれる。時代、政府、その他の重要な變化及び國家の變化、一言で謂ふと、歴史年

表に現れるところのものは、悉く普遍なるものであつて、而して特殊なるものがこれに従屬すると論じて反對するかも知れない。けれども、これは普遍といふ概念を誤り解したものと云はなければならぬ。といふのは此處に謂ふところの歴史上の普遍なるものは、單に主觀的なるものであり、事實に關する個別智識の不十分なところからして起つて來るものであつて、客觀的なるものではない。即ち、事實そのものの中に共に考へられた概念ではないのである。それで、歴史に於ける最も普遍なるものであつても、それ自體やはり單に個々の單獨なるものである。つまり、ある長い時間とか、若くば主要な事件とかいふものである。随つて、特殊なるもののさういふものに對する關係は部分の全體に於けるやうなものであつてあらゆる自然科学の場合に見るやうな、事件の法則に於ける關係の様なものではない。が、科學の興ふるところのものは、單なる事實ではなくして概念なのであるから普遍なるものを正しく知りさへすれば、現れて來る特殊なるものをば確に規定することが出来るのである。例へば、三角形に關する法則一般を知れば、目前に在る三角形の如何なる屬性を有すべきかを、その法則に従つて示すことが出来る。而

してまたあらゆる哺乳動物に當嵌まるところのものは、今捕へたばかりの蝙蝠にも當嵌まるといふことは、これを解剖して見なくても分かるのである。

ところが、歴史に於いては、その普遍なるものといふのは、既に前に述べたやうに、客觀的なるものであるのではなくして主觀的なるものであり、たゞ皮相的に普遍なるものたるに止まるのである。それで、例へば三十年戦争に就いて、それが十七世紀に行はれた宗教戦争であるといふことは、何時でも知ることが出来るけれども、さういふ一般的な智識なるものは、その経過に就いて詳細な何事をも談るものではないのである。

ところで、眞の科學に於いては、特殊な、個別的なるものは直接的知覺に基くからして最も確實なものであるのであるが、普遍的眞理なるものは、特殊な個別的なるものから抽象されて始めて出來て來るものであるから、さういふ眞理の中には、場合によつては謬つてゐても眞理とされるといふことがあり得るのである。これに反して歴史に於いては、最も普遍なるものが最も確實なものである。即ち、時代、帝王の相承、革命、戦争と平和條約といふやうなものがさうなのである。

ところが事件の特殊なるもの及び其の關聯の特殊なるものは一段不確實なものである。而して特殊なるものとなればなるほど益々不確實なものとなるのである。それで、歴史なるものは、實際特殊なるものとなればなるほど益々興味深いものとなりはするけれども、然しまた益々信を措き難いものとなつて來るのである。かくて、歴史は、さういふ點に於いて稗史に近いものとなるのである。

さて、歴史なるものが、常に特殊な個別的なる事實を對象とし、これを専ら實在して居るものと見る限り、普遍的見地からあらゆる事象を考察し、特殊なるものの中に在つて同一に存する普遍なるものをその對象とする哲學と、正しく相反してゐる。それで、哲學は特殊なるものの中に於いて常に普遍なるものを見、而して現象に於ける變化を以て非本質的なるものと認めるのである。ところが歴史なるものは常に我々に對して一のものが他のものとなることを教へるが、哲學は常に過現、未に互つて全く同一に存する實在の認識に達せしめようとするのである。

實に自然並に人生の本質は變らずに存するものであつて、それが残る限なく認識されようといふのは、深い理解を要するのであるが、歴史なるものはその深から

んよりも、その長くして、且、廣からんことを望むものである。即ち、歴史の上から言ふと、現在なるものは無限の過去によつて補れなければならぬし、且、無限の將來のそれに連結せる一斷片に過ぎないのである。此處に哲學的頭腦を有する者と歴史的头腦を有する者との反對が存してゐるのである。といふのは、前者は闡明しようとするし、後者はどこまでも算へようとするのである。歴史はいづれの方面に於いても、同一なものを、たゞ異つた形式に於いて示すに止まつてゐる。が、同一なものを、一つの形式若くは少數の形式中に認識しない人は、あらゆる形式を通覽してもその認識に達することは六ヶ敷からう。民族史の章は、根柢に於いてはたゞ名と年號とが異つてゐるといふだけであつて、その眞の本質的内容に至つては到る處同一であるのであると。

シヨオペンハウアが、歴史に於いてとかく等閑に附され勝な特殊なる方面に注意したのは、渠の識見を見ることが出来る。けれども、渠が、歴史を以て事實を單に並置するだけのものであるから科學としての根本性質を缺いてゐるものと考へたのは歴史の本質を把握し得なかつたものと言はなければならぬ。なるほど

歴史の取扱ふところの對象なるものは、個別的な事件であるに相違ない。けれどもその個別的な事件なるものは、たゞ單に個々別々な事件であるのではなくして、その間に何等かの關聯の存してゐる事件であるのである。勿論、その關聯たるや一派の人達の考へるやうに、因果的關聯のやうなものではないにしても、一回限りの特殊なるものの中に、また自ら一貫せるあるつながりの存することを認めざるを得ない。随つてシヨオペンハウアのやうに、歴史には體系がないから科學ではない、と簡單に片付けて了ふ譯にはゆかない。

勿論、その體系たるや、他の科學のそれとは同一視することの出来ないものである。然し事件と事件との間に何等かのつながりの存してゐる以上、各の歴史はいづれも獨特な一體系を爲してゐるものと言はなくてはならぬ。随つて歴史なるものは、單に個々別々なものに關する智識の聚積に止まるものではなくして、一回限りの特殊なるものの關聯せる體系であると言ふことが出来る。かくてたゞ一回限りの特殊なる事件を際限なく並置したものは年代記と言ふことは出来やうけれども、嚴密な意味での歴史と言ふことの出来ないものである。

シヨオペンハウアが、普遍概念、即ち、法則を教へるものだけに科學の名を許して、一回限りの特殊なる事實の關聯を明かにする歴史に對してこれを拒むのは、畢竟、自然科學的意味に科學を解してゐるだけではなく、「歴史的なるもの」の本質を如實に把握し得なかつた所からである。と謂はなくてはならない。

惟ふにシヨオペンハウアは、歴史上の事實に於いて特殊の一面を見たゞけである。かくて、歴史を以て個々別々なものを限りなく掻き集めなければならぬもののやうに考へたのである。が、それは歴史なるものの半面を見たに過ぎないのであつて、歴史に於いても、渠が哲學に於いても、缺くべからざるものと考へたと同じ深い理解が缺く可からざることを忘れたものと言はなくてはならない。が、然し渠が歴史に於ける特殊なる方面に注意を向けたのは、確に歴史考察上、一轉期を劃したものと云ふことが出来るであらう。

二 Schopenhauer, *Sämmtliche Werke*, Bd. II, S. 515—524.

前述のやうに、シヨオペンハウアは歴史なるものを以て個々別々なものを對象とするものであつて、普遍を把握するものではないとなしたのであるが、その點に於いてヴァインデルバントも同様の見地に立つてゐる。が、然し渠は、シヨオペンハウアのやうに、歴史を以て科學となすことには反對してゐない。といふのは、ヴァインデルバントは、歴史なるものは自然科学とその方法を異にしてはゐるが、而も經驗科學に屬すべきものであると考へたからである。

が、ヴァインデルバントも、歴史に於いては、過去の事件をその全體的個別的な形で新に生かして來なければならぬからして、さういふ點に於いて歴史創造と美術的創造とは似てゐる。歴史と文學とは似てゐると言ふところから見ると、シヨオペンハウアの考に近いところがあると言はなくてはならない。

ところで、ヴァインデルバントは現實の認識に關する學は、通常自然科学と精神科學とに分かたれてゐるのであるが、その分類は不合理であるとなして、かう論ずる。自然科学と精神科學の分類の基いてゐるところの、自然と精神といふ區別は、古から行はれてゐるものではあるが、最近の哲學の氣分、認識論的批判の結果を考へ

ると、その區別は確實にして自明なものとは認められないし、それから自然と精神といふ對象上の反對は、認識の方法上の反對と一致するものではない。といふのは、心理學なるものは、その對象から見ると精神科學に屬するものとするの他はなし、其の上、ある意味から言ふと、精神科學の基礎であるとも考へられるのであるが、然しその採るところの研究方法なるものは、全く自然科學的なものであるからである。

ところで、さういふ困難の起つて來るやうな分類といふものは、體系的なものとは見られない。では、心理學の採るところの方法と自然科學の採るところの方法とが、どういふ點に於いて似寄つてゐるかといふと、つまり、心理學なるものも自然科學と同じやうに、その事實を確定し、蒐集し、加工して、それから事實の従ふべき普遍的合法則性を把握しようとするのである。勿論、心理學の對象と自然科學の對象とは、その性質を異にしてゐるのであるから、事實確定の方法、歸納的手續の工合、見出された法則の採る形式といふやうなものは、非常に異つてゐるに相違ない。けれどもその認識目的は同一である。即ち、法則に達しようとするのである。

ところが、歴史科學と呼ばれるところのものは、一回限りの現實な個々の事件を十分に描寫しようといふ目的を有してゐるのである。尤も、歴史科學なるものは、種々の學を包含してゐるからして、その對象も雜多であり、對象を把握する手段も非常に雜多であるには相違ないけれども、その認識目的は、一回限りの現實に現れた、人間生活の構成したところのものをば、その儘に再生し、理解しようとするに在るのである。此處に、純粹方法論的であつて、且、確實な論理的概念の基礎の上に立つて居る經驗科學の分類が存してゐるのである。で、科學分類の原理はその認識目的の形式的性質に存してゐるといふべきである。即ち、一つは普遍的法則を覓め、今一つは特殊な事實を覓めるのである。これを形式論理學の言葉で言ひ表すと、一方の科學の目的は全稱的必然的判斷であるのであるが、今一方の科學の目的は單稱的實然的命題であるのである。この區別は、人間悟性に於ける最も大切に、して、的確な關係であるところの、普遍と特殊とに關聯してゐるのである。かくて、經驗科學は現實を認識するに方つて或は自然法則の形式に於ける普遍を覓め、或は歴史的に確立せられた形式に於ける特殊を覓めるのである。随つて、

經驗科學は、一部に於いては、現實な事件の變らない形式を考察し、又、一部に於いては、現實な事件の一回限りの内容を考察するものである。一つが法則の科學であり、今一つが事件の科學であるのである。一つは變らずに存するところのものに就いて教へ、今一つは一回限りの過ぎ去れるところのものに就いて教へるのである。新しい言葉でこれを言ひ表すことが許されるならば、一つは法則を立つるもの *nomothetisch* であり、今一は個體を描寫するもの *idiographisch* と言へる。これ、普通に言ふところの自然科學と歴史科學との反對を表すものと言ふことが出来る。尤もこの場合に於いては、心理學なるものの全く自然科學の中に數へらるべきは、言ふまでもないことである。

さて、この方法論的反對は、智識そのものの取扱方に関する分類であつて、その内容上の分類ではないといふことを忘れてはならない。随つて、同じ對象であつても、或は *nomothetisch* な研究の對象となり、或は *idiographisch* な研究の對象となることが出来るし、而して事實上に於いてもさうなつてゐるのである。これ、常に等しいものと、それから一回限りのものとの反對は、ある點に於いて、相對的なものであ

るといふことと關聯してゐる。それで、非常に長い期間直接に認められるやうな變化を受けないところから homothetisch に取扱つて差支ないものであつても、一層廣い見地に立つてこれを見ると、一定時の間效力を有する一回限りのものであることが出来るのである。

かくて、例へば特殊な言語なるものは、その表現は變つても變らずに存する形式法則によつて支配されてゐるのである。ところが、一方に於いては、それが人間の一般言語生活に於ける一回限りの現象であるに過ぎないのである。それと同様な事が、生理學に就いても、地質學に就いても、ある意味に於いては天文學に就いても言はれ得るのである。随つて歴史的原理なるものは、自然科學の範圍にまでも推し及ぼされるのである。この模範的な例は生物の學である。生物の學なるものが體系學として數千年間變化せず存するものと從來觀察された生活體の型をば、その合法的な形式として考察する限りに於いては、homothetisch な性質のものであるが、然し、進化史として地上の有機體の全系列をば、時の経過の中に漸次に發生した過程であるとなし、或は漸次に變化し來つた過程であるとなしてこれを

描寫すれば、*idiographisch* のものとなるのである。

ところで、自然科学にしてもまた歴史にしても、経験科学といふ性質は共通に有してゐるのであるから、兩者ともその出發點として——論理的にこれを言ふと、その證明の前提として——経験、即ち、知覺上の事實を有するのである。然しその経験なるものは、素朴な人々の通常有つて居るまゝのもので満足することが出来ないのであるから、科學の基礎たる経験といふものは、科學的に淨化され、批評的に検討されたものでなければならぬのである。さういふ點に於いては、自然科学も歴史も互に一致するのである。

然しその經驗上の事實を利用する爲方になると兩者互に異つて來るのである。といふのは、一方は法則を覚めるのであるが、一方は形式を覚めるのである。即ち、一方では、思惟なるものは特殊なるものの確定からその間に存する普遍の關係を把握しようとして進んで行くけれども、今一方では、特殊なるものを作り上げようとするのである。

自然研究者に取つては、觀察された個々の事象は、それ自體に於いては、何等科學

的價値を有するものではなく、それが類の概念の例として見られ得る限りたゞ價値を有するに止まるのである。随つて、自然科学者は個々の事象に於いて單に合則的普遍性を見るのに適はしい性質だけを考察するのである。ところが歴史となると、過去の事件をば特殊なる全體として生かして來ようとするのである。それで、自然科学的思惟に於いては抽象の傾向が主となり、歴史的思惟に於いては直觀の傾向が主となるといふ結果となるのである。

ところで、役に立つといふ點から考へると、いつれの思惟の方向も同じであると言へる。といふのは、普遍的法則を知れば未來の状態を豫知して、目的に適ふやうにそれに干渉することが出来るといふ實際的價値があるし、又、歴史上の知識は共同的人間生活に於けるあらゆる目的活動の指導となるからである。一體、人間といふものは歴史を有する動物であつて、その文化生活なるものは、つまり世代から世代へと凝集した歴史的關聯であるのである。随つて何人でもその關聯の中に入らうと思ふ者はその發展を理解しなければならぬのである。が、さういふやうに役に立つといふことは別として、對象の認識價値に於ける客觀的な純粹理論

的な差別が問題となつて來るのである。

惟ふに特殊なものは一層普遍的な建物の土臺とならないならば、たゞ無用な珍らしいものと言ふに止まるのである。それで、科學的の意味に於いては、事實といふものは既に目的論的概念であるのである。即ち、科學に取つては何でも現實なものなら悉く事實であるのではなくして、科學がそれから何事かを學ぶことの出來るものだけが事實なのである。殊に歴史に於いてさうである。随つて歴史的事實でない事件が澤山ある譯である。例へばゲエテが一千七百八十年に戸口の鍵と、一月二十二日に名刺筐とを作らせたといふことは確實な事實であるが、然しそれは歴史上の事實でもなければ、文學史上の事實でも、また傳記上の事實でもないのである。が、觀察された事實若くは傳來の事實に對して眞に事實たる價値が屬してゐるか然らざるかは、ある範圍内に於いては、前以て決めることが出來ないのであるから、科學がそれを篩分けなければならぬ。

けれども特殊なる智識をば大なる全體の中に按排しようといふ目的は、特殊なるものを歸納的に普遍概念若くは普遍的判斷の下に従屬せしめる場合だけに限ら

れずして、それが、すべて個別の特徴の失はれない總體直觀(人生)の大切な要素として按排される場合に於いても達せられるのである。

ところが、從來普遍の一方だけに重きが置かれて、特殊な一方面が忘れられてゐたのである。實證論者の所謂歴史哲學なるものの主張したやうに、歴史を以て自然科學とするといふ場合に於いてはさうなつて來るのであるが、歸納によつて民族生活の法則を引出さうとしたところで、少數の役に立たない一般的な法則を生ずるに過ぎないのである。

ところで人間の興味評價は個別的な一回限りのものに關係するものであつて、對象がいくつでもあるといふやうなものに對すると、その感情は鈍つて了ふのである。けれども、*idiographisch*な科學であつても、それが學として進んで行くといふには、普遍的法則を要するのである。而してその普遍的法則を打建てるのは、*nothetisch*な學に他ならないのである。

一體、歴史的過程の因果の説明といふものは、事象一般の經過の普遍的觀念を豫想するものであつて、歴史的説明を全く論理的形式なものとして見ると、その證明

の大前提たるものは現象の自然法則である。殊に心的現象の自然法則である。人間が一般に如何に考へ、如何に感じ、如何に意志するかに就いて少しも考へを有つてゐないものは、個別的な事件を擱んでその認識に達することが出来ないであらう。否、事實を批判的に確定することすら出来ないであらう。

が、然しかういふ場合に於いて歴史科學の心理學に對する要求は大したものではない。といふのは、從來心的生活の法則として與へられてゐるところのものは、非常に不完全なものであつたのであるけれども、それが決して歴史家の妨げとはならなかつた。即ち、歴史家は自然的な人性の智識・機才・天才的直觀によつて、人物とその行爲とを理解することを十分に知つてゐるのである。これに由つて觀ると、科學的心理學の要素的な心的過程の數學的自然法則的説明といふやうなものが、現實の人間生活の理解に取つてどれだけの効果のあるものであるかは疑問である。

以上述べた人間の智識の二つの要素は共同の源泉に還元することの出来ないものである。けれども、個々の現象の因果的説明は普遍的法則に還元されるから

して、現實な現象の歴史的な特殊な形態もその終極に於いては事象の自然合法則性から理解することが可能でなければならぬ、といふ思想が起つて來もするけれども、然しそれが不可能であるといふことは、單純な論理的圖式に於いてこれを明かにすることが出来る。

一體、因果考察に於いて、各特殊な現象は三段論法の形式を取るものであるが、その大前提たるところのものは自然法則であり、その小前提たるところのものは時間的に與へられる條件であり、而してその結論たるところのものは現實な個々の事件であるのである。が、論理上、結論といふものは二つの前提を豫想すると同じやうに、事件といふものは二種の原因を豫想する。即ち、一方では事象の永遠の本質の表現される時間を超越するところの必然性と、一方では一定時間内に起る特殊な條件とである。例へば爆發の原因は *nomothetisch* な意味では、化學的物理的性質として言表されるところの爆發物の性質であるが、*idiographisch* な意味では、個々の運動、火花、振盪の如きである。而してその兩者が結び付いて事件を生するのである。けれども、そのいづれも一方から出て來たものではない。而してその結合

は兩者そのものの中に基いてゐるのではないのである。

つまり、三段論法に於いて、小前提が大前提から出て來たものでないのと同じやうに、事件に於いても、普遍的本質に加はる條件なるものは、法則的本質そのものから引き出されないものである。寧ろ、その條件なるものはそれ自體時間的事件として他の時間的事件から法則必然性によつて出て來たものなのである。而してその事件はまた他の事件に基くといふやうにどこまでも進んで行くのである。かういふ無限の系列の發端は概念的には考へられない。而してそれを表象しようとしても、その發端は常に事象の普遍的本質に附加はつたものであつて、それから出て來たものではないのである。これを今日の科學の言葉でいふと、普遍的自然法則からして直接それに先つものを豫想して始めて現在の世界状態が出て來るのである。而して直接普遍的自然法則に先つものは、その前のものを豫想するといふやうにどこまでも進んで行くのである。

けれども、原子の一定の特殊な成層状態なるものは普遍的運動の法則そのものから出て來るものではない。一定の時に於ける特殊性なるものは世界法式から

は直接に展開され得ない。随つて因果の法則の下にあらゆるものを包攝したか
らとて、時間の中に與へられた特殊なものをその最後の基礎まで分析することに
はならない。

それで、あらゆる歴史的個別的に經驗されるものに於いては、吾々に取つて理解
することの出来ない剩餘が残るのである。即ち、何とも名狀することの出来ない、
定義することの出来ないものが残るのである。かくて、人格の最も内的な最後の
本質は普遍的範疇による分析を容さない。而してかういふ理解することの出来
ないものが我々の意識には我々の本質の無原因性として現れるのである。即ち、
個人的自由の無原因性として現れるのである。形而上學的概念及び問題の多く
は此處から起つて來るのである。時間の中に與へられたもののすべては普遍的
合法則性の外に存してゐて、他のものからは導き出すことの出来ない獨立なもの
として現れるのである。而して世界現象の内容なるものはその形式からしては
理解の出来ないものであるのである。

それで、特殊を普遍から、多を一から、有限のものを無限なものから存在を本質か

ら概念的に導き出さうといふあらゆる試みは成功しなかつたのである。哲學的世界説明の大體系はこの罅隙を蓋はうとしたけれども、これを充すことが出来なかつた。とにかく、法則と事件とは吾々の世界表象の最後の測ることの出来ない二つの量であつて、相並んで存してゐるのである。此處に科學的思惟が解決の不可能なるを明かに意識して單に問題を確定し疑問を提出し得る限界點が存してゐる、と。

ヴインデルバントの歴史に關する上述の思想は、リツカアトに於いて論理的に推進められてその歴史科學の理論となつて居るのであるが、それはかうである。

さて、リツカアトに據ると、科學なるものは之が取扱ふ對象と之が適用する方法とに就いて互に區別され得るものであるから、形式的見地と實質的見地の下に分類さるべきであるけれども、かういふ二つの分類原理は畢竟一つに歸するものだといふことは餘り認められてゐない。今日一般の分類に於いては實質的の分類原理として自然と精神といふ概念が基礎となつてゐる。而して自然といふのは物的なもの、精神といふものは心的なものとして解されてゐるのである。

ところで、物的世界に對する心的生活といふ内容上の差別からして同時にまた二つの方法の形式上の區別が導き出されるのである。けれども、物と心といふやうな實在に就いての對象の區別は特殊科學の區別には見出すことが出来ない。といふのは少くとも直接に知ることの出来る現實に於いて、自然科學の採る研究方法であつて原理上行はれ得ないものはありはしないからである。それで、現實なもの全體として、即ち、あらゆる物的及び心的存在として同一の方法で研究され得るのである。

して見ると、物的世界、心的生活といふやうな實質上の區別から特殊科學を分類することは出来ないことになる。随つて、特殊科學の分類の基礎になるべき對象の實質上の反對は自然と文化といふ二つの概念に覺めるの他はない。かういふ二つの概念に基いて科學を分類すると特殊研究家の興味反對を最もよく表示することが出来るのである。

ところで、科學を自然科學と文化科學に分類するのは、唯、實質的原理の上からだけではなくして、その上に形式的分類原理が附加はつて來なければならぬ。而

してそれによつてこの二つの概念が普通理解されて居るよりも一層複雑なものとなつて來なければならぬ。といふのは、自然といふ概念がたゞ物的世界を意味するだけではなく、普遍的法則によつて規定されるものといふ形式的論理的意味を得て來ることになると、その特殊性に於ける一回限りの現象といふ最も廣い形式的意味での歴史の概念と形式的反對に立つことになるのである。そこで、實質の上からいふと自然と文化とは反對をなし、形式上からいふと自然科学的方法と歴史的方法とは反對をなすといふことになるのである。

さて、自然と文化といふ二つの概念であるが、自然といふのは自ら成立ち自ら成長するまゝになつてゐるすべてのものを指してこれを言ひ、文化といふのは目的行動をする人間が直接に作り出したもの若くは有意的に手を加へたものを指してこれを言ふのであるから、自ら成立ち自ら成長するまゝになつてゐるものは價值とは何等關係なしに考察され得るものであるけれども、文化の事物には價值がくつ付いてゐるのである。それで、自然の過程は價值としては考へられないものである。随つて、文化の對象であつても價值を去つて了へばまた單なる自然とな

るのである。

それで、我々は價值に關係するの如何によつて確に對象の二種類を區別することが出来るのである。而してどんな文化過程であつてもそれにくつ付いてゐる價值を離れると、自然と關聯したものの、隨つて自然として考へられなければならぬものとなつて來るのである。ところで、文化價值なるものは何人にも妥當性を有するものであつて單に衝動的に評價され追求されるものではないのである。

自然科学と文化科學の區別が自然と文化といふ對象上の差別に止つて、常に同一方法で研究されるものであるとすると、論理上あまり意味のないことにならうけれども、兩者の間には別の深い差別が存してゐるのである。今これを示さうといふには形式的分類原理に就いて述べなければならぬ。

さて、自然科学的方法に於いては、その目的とするところ普遍概念、即ち、法則に達しようといふのであるから、事象及び過程に於いて共通なものが本質的なるものと考へられ、全く個別的な一回限りなものは非本質的なるものとして捨てられて了ふのである。所が、現實なものは特殊的な個別的なものであつて決して共通な

要素から成立つものではないのであるから、そこで、概念の内容と現實との間に
隙が出来て來ることになるのである。が、かういふと自然科学の結果を現實に應
用することが不思議のやうに思はれやうけれども、自然科学の結果を現實に應用
するからとて、それが決して個別的な特殊なるものに及ぶのではない。随つて我
我が自然法則に従つて豫言することの出來るのは、たゞ現實に於ける普遍なるも
のに就いてに止まつてゐる。而してそれによつて我々の態度を定めて行くので
ある。で、世界が若し普遍化され單純化されないならば、それを計算し支配するこ
とが出来ない譯である。個別的な特殊なもの限りなき雜多は普遍化する概念
形成によつて征服されなければ、我々をして困惑せしめて了ふに相違ない。とに
かく、自然科学的方法なるものは普遍化するところのものである。これに反して
歴史なるものは個別的な特殊なるものに就いて現實を取扱ふものであるから、自
然科學的方法の普遍化に對して歴史的方法なるものは個別化するものであると
いふことが出来る。

さて、歴史なるものは一回限りの特殊な個別的なるものを描寫するを以てその

目的とするものであるとすると、それが如何にして科學となることが出来るであらうか、といふ疑問が起つて來るのであるが、その疑問が歴史的概念形成の疑問といふことが出来る。といふのは、我々が概念といふ場合には現實の科學的本質要素の概括といふ廣い意味にこれを用ゐるからである。概念なる語をさういふ廣い意味に用ゐて差支ないといふことは、概念を形成するといふことと普遍化するといふこととは一致するものでないといふことが分かれば了解されるのである。そこで、特殊な個別的なるものの内容となつて居る概念の指導原理を見出すといふことが問題となつて來る。而してその疑問に答へると歴史科學の形式的性質ばかりでなく、結局、自然科學と文化科學との實質的區分の正當なることが分かつて來る。

さて、何等の價值もくつ付いてゐない、随つて單なる自然として考察される現實に於いては大抵の場合たゞ論理的な意味での自然科學的興味が存してゐるに止まつてゐる。それで、さういふ場合に於いては、個々の事象はその特殊性に就いて問題となるのではなくして、通常單にいくらか普遍的概念に對する見本として問

題となるだけである。ところが、文化過程に就いてはさうではない。といふのは我々の興味は特殊な個別的なるものに向ひ、その一回限りの経過に向ふのである。随つて、我々はそれを歴史的に個別化して知らうとするのである。それで、特殊科學の方法の實質的原理と形式的原理との最も普遍的な關聯が出来た譯であるし、而してまたその關係の根據は容易に理解されるのである。即ち、一對象の文化的意味はそれが全體として考察されるところに在つて、他と共通に有するところのものに依るのではない。否、正しく他と區別されるところに依るのである。

それで、我々が文化價值に關係して考察するところの現實なるものは、特殊な個別的なるものとして考へられなければならないのである。實に一過程の文化的意味は、その文化價值が個別的なるものと専ら結び付いて居れば居るほど屢増して來るのである。それで、文化過程であつてその文化價值としての意味が問題となる場合に於いては、たゞ個別的な歴史的取扱がそれに適應する。けれども、それが自然として見られると文化過程は價值を離れた類の見本となつて了ひ、その類の中の他のものと取換へられ得るものとなるのである。かくて自然科学的の普

遍的な取扱だけでは我々を満足せしめないことになる。文化生活をば自然科学的に叙述するといふことは、假令正しいことであるにしても唯一なものとしては不十分である。

そこで、文化の概念から科學としての歴史が可能になつて來るのである。即ち、文化の概念からどうしても個別化する概念形成が起つて來なければならぬことになるのである。かくて、文化といふ概念によつて、科學的には描寫することの出來ない單なる異質性から描寫することの出來る個別性が出て來るのである。

即ち、文化といふ概念が、現實をば歴史科學に取つて本質的なものを非本質的なもの、言ひ換へると、歴史的に大切な個別的なるものと單に異質的なものとのを別つのである。而して異質的なものは現實そのものと一致するものであつて、科學の對象とはならないものである。ところが、個別的なるものは現實の一定の把握であつて概念の中に入るところのものであるのである。歴史家なるものは限りなき雑多から文化發展に取つて意義あるものを選び出すのである。

かくて、歴史的な概念形成には文化といふ概念が本質的なものを選び出す原理

となるのである。それは丁度自然科学に取つて普遍の上から見た現實としての自然といふ概念がその選擇原理となるのと同様である。文化にくつついてゐる價值により、而してまた價值に關係してゐるところから描寫することの出来る歴史的個別性といふ概念が始めて構成されるのである。

ところが、價值の見地といふものは特殊科學から除いて了はなければならぬものだといふやうな獨斷的見解が廣く擴つてゐるのであるが、さういふ見解に従ふと、特殊科學に於いては現實に存するところのものに限らるべきである。随つて、事象の價值如何といふやうなことは歴史家の關するところではないといふのである。ある意味に於いては全くその通りである。歴史家は事象の價值あるや如何を決定するのではなくして現實にあつたところのものを描寫すればよいのである。といふのは、歴史家は理論家であつて實際家ではないからである。然しそれは歴史なるものは價值を取扱ふものだといふことと矛盾するものではないのである。

一體、歴史が價值を考察するのはたゞそれが事實上主觀によつて評價される、隨

つて、事實上ある對象が財寶として考へられるといふ點に於いてに止まつてゐる。歴史は價值を取扱ふと言つたところで評價する科學であるのではない。歴史に於ける價值關係は事實確定の範圍に止まるものであつて、實際的評價ではないのである。若し歴史なるものが毀譽褒貶の批判を下すといふやうな場合に於いては實在の科學としての範圍を逸脱するものと言はなければならぬ。

以上述べたやうに、歴史に於いては價值關係なるものはたゞ事實の選擇に関するに止まるからして、價值の見地に於ける考察を目的論的考察といふ時には誤解を起させる虞があるといふのは、目的論的考察といふと現實に對する因果的見解と衝突するかのやうに考へられることがあるからである。

惟ふに個別化する價值に關係する歴史であつてもやはり一回限りの個別的過程の間に存する因果的關係を研究しなければならぬ。而して個別的な因果關係の描寫には歴史的概念の要素として普遍概念も必要であるが、さりとて歴史に於ける因果關係と普遍的自然法則とは同一のものではないのである。それで、歴史に於ける目的論的考察といふのは、歴史に於ける本質的なるものの選擇の方法

論的原理が價値に依存して居り、而してまた原因の疑問に於いて文化財の實現に取つて大切な原因だけが考察される限り、價値に依存してゐるといふに在るのである。で、さういふ目的論なるものは因果と少しも反對するところのものではないのである。

ところで、その價値であるが、それは歴史家の勝手な價値であつてはならない。どうしてもあらゆるものによつて妥當性を有するものとして認められる普遍的な文化價値でなければならぬ。文化價値の客觀性の基づくところは文化價値なるものがさういふ普遍性を有するところに在るのである。

それで、歴史に於いて描寫される特殊な個別的なるものは只の特殊な個別的なるものではなくして、それと同時に普遍的意味を有するものでなければならぬ。随つて、歴史なるものは個々の事實の單なる叙述より成るものではない。歴史に於いても自然科学に於けると同じやうに特殊なるものが普遍なるものの下に従屬せしめられる。けれども、それにも拘らず自然科学の普遍化する手續と歴史の特殊化する手續との反對はやはり存してゐるのである。といふのは、歴史的に普

遍なるものは特殊なるものがその中のたゞ一つの場合であるに過ぎない普遍概念、即ち、自然法則ではなくして、文化價值である。而して文化價值なるものはたゞ一回限りの個別的なるものに於いてのみ漸次に發展し得るところのものである。それは、個別的現實を普遍的價值に關係さすからとて、それで以て普遍概念の見本とはならずして、その個別性に於いて意味あるものとして残るのである。

要するに經驗科學なるものには一方に自然科學があり一方には歴史的文化科學があるのであるが、自然科學の自然といふ語はその科學の對象並に方法の性質を同時に表してゐる。即ち、自然なるものは價值關係を離れ、且、普遍的に解された現實であるのである。然るに一方には自然なるものに對應する語が缺けてゐる。それで、自然なるものの有つてゐる二つの意味に對應する二つの語が擇ばれなければならぬ。文化と歴史が即ちそれである。而して文化科學としては普遍的文化價值に關係してゐる對象を取扱ひ歴史科學としてはその對象の特殊性個別性に於ける發展を描寫するのである。^(四)

(III) Windelband, *Geschichte und Naturwissenschaft. In Präludien.* Bd II, S. 136—160.

(四) Rickert, Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung. S. 274—389.

以上述べて来たところで明かであるやうに、ヴァインデルバントにしてもリツカアトにしても、歴史に於いて一回限りの特殊な方面を高調し、而して自然科学に於ける普遍に對立するものと考へたといふことは確かに誤りではない。けれども、歴史に於ける一回限りの特殊な事件と事件との間の關聯を覚めるに方つて彼等は自然科学的精神に誤られていづれも因果關聯を覚めるに在るとなしてゐるのである。素より歴史に於ける因果關聯なるものは自然科学に於けるやうな普遍的因果關聯ではなくして、一回限りの特殊な事件と事件との間に於ける個別的因果關聯であるとなしてゐるには相違ない。けれども、いづれにしても原因結果の關聯に他ならないのである。

それで、彼等の見地は歴史的存在、歴史的现实をあるがまゝに見たものとはいへない、どうしても歴史的存在、歴史的现实を外的に因果的考察の見地から見たものと言はなくてはならない。かくて、さういふ外的な因果的考察の見地を離れて歴史上の事件を見ると、一回限りの特殊な事件であるからして、それ自體に於いては

何の關聯もないものとせざるを得ない。そこで、シヨオープンハウアの言つてゐるやうに、歴史上の事實はたゞ個々別々な事實の集積たるに止まるといふことにならざるであらう。それではヴァインデルバントが一回限りの現實に現れた人間生活の構成したところのものをその儘に再生し理解しようといふ歴史科學の認識目的は十分に達せられるものではない。といふのは、一回限りの現實に現はれた、人間生活の作り出したところのものは單に個別的なる特殊なものたるに止まるものではないからである。

さりとてリツカアトの言ふやうに、歴史に於いて描寫されるところの特殊な個別的なものは普遍的價值に關係するものであるから只の特殊な個別的なものであるのではなくしてそれと同時に普遍的意味を有つてゐるものであるとなしたからとて、それで以て一回限りの特殊の事件そのもの間に關聯が付く譯のものではない。といふのは、リツカアトの意見に據ると、文化價值なるものはたゞ一回限りの個別的なるものに於いてのみ漸次に發展し得るものであり、之の個別性に於いてのみ意味があるといふのであるからである。それで、一回限りの個別的なる

ものが普遍妥當性を有する文化價值に關係するからといつて一回限りの個別的な事件そのもの間に關聯があるとする事は出來ない。リツカアトに於いても歴史上の事件は本質上やはり個別的單獨的なものたるに止まるのである。随つてその間に關聯を付けやうとすると、因果關聯を究めるの他はないことにならう。而もこれ歴史的存在、歴史的現實を外的に見たものであつて、歴史的存在、歴史的現實そのものがあるがまゝに見たものと言ふことは出來ない。

かういふやうに言つたからとて、自分は概念的に特殊を普遍から、多を一から、有限を無限から、存在を本質から導き出し、かくて一回限りの特殊な事件の間に關聯を付けようとするものではない。たゞ歴史的なものの本質の把握によつてその間の關聯を究めようとするに止まるのである。そこで歴史的なものの本質の把握が如何にして可能であるかといふ疑問が起つて來るのである。

四

さて歴史的なものは各方面から既に説かれ來つたやうに、一面に於いては確か

に一回限りの特殊なるものであるに相違ない。けれどもそれは何等の關聯をも有してゐない個々別々なるものであるのではなくして、一回限りの特殊な個別的な事件の間に一貫して流れてゐるあるものがある。それを歴史的生命の流れと名づけることも出来るであらう。とにかく歴史なるものは人間意志の所産に他ならないのであるからその目的論的關聯の內的統一のその中に存してゐることは言はずして明かである。而してそれを我々は內的省察によつて直接に把握することが出来るのである。デルタイが歴史的世界の會得的把握を説いたのは道理あることと言はなければならない。

歴史的存在、歴史的現實の把握に取つて大體上我々の意を得てゐるのはミュンスタアペルヒの見解である。渠は言ふ。

物心の世界は認識論上原始的な現實的自我と實際關聯してゐる點から考察されもすれば、またさういふ自我から解放されたものとしても考察されることが出来る。すべて經驗科學なるものは知覺され得る現實だけを認識しようとするものであればかういふ見地は成立しないであらうけれども、さういふ主觀機能が論

理上原始的なものとしてその目的論的關聯の內的統一の中に存してゐることは自己省察によつて分かる。而してその現實價値はそれを心理的主觀に取つて知覺された經驗に過ぎない心理的過程であるとして時には失はれて了ふのである。で、我々が心理的過程を一回限りのものとして敘述しようと合法則なものとして説明しようと變りはない。かういふ見解が正しいものとするとき精神科學は敘述をなすべきでないといふことになる。といふのは、敘述といふと、獨立してゐる對象を豫想するからである。ところが、精神科學といふ主觀化するところのものはたゞ會得し評價するに止まつてゐる。これに反して客觀化する科學である心理學や自然科學なるものは對象と考へられる限り普遍なものばかりでなくまた一回限りのものでもこれを取扱ふのである。が、精神科學はその對象の主觀化的に考察される限り一回限りのものであつてもまた普遍なものであつても等しくこれを取扱ふのである。

それから敘述と説明とは實際分つことは出来ないし法則と事件とは反對をなしてゐるものではない。蓋し事件が知覺さるべき對象の世界に於ける過程と考

へられる限りさうである。一體、敘述なるものが論理的價値を得るやうになるのはそれが關聯を示すところに在るのである。それで、我々は何時でも何等かの共同表象に基いて概念で以て過程を記述するのである。而して其の中に入り來るところの判断が法則の性質を有つやうになれば、それによつて科學上一段價値あるものとなつて來るのである。随つて、歴史と自然科學との區別は、前者が過程を敘述し後者がそれを法則的に解するに在るのではない。といふのは、敘述するといへば法則をそれに作り上げようとするに他ならないからである。

上述の見解に對して、我々は實際生活に於いては過程を上位の概念を使はずに敘述することが出来るし、また詩人や歴史家も同じやうに過程を敘述することが出来るところから反對が起つて來るのである。一體、感情を描寫したり風景を描寫したりする詩人は心理學的關聯若くは自然科學的關聯を表することを目的とするものではない。さういふ意味から科學的心理學に對して藝術的心理學を對立させようとしたものがあるけれども、それには二様の點に注意すべきである。第一にさういふ場合に於いては客觀的描寫が敘述の終極目的ではなくして敘述

そのものがたゞ主觀的考察の補助手段に過ぎないといふことである。それから第二に傳達することがすべて敘述することではないといふことである。子供の笑や泣聲は我々に子供の心情の状態を知らしめるけれども敘述ではないし、また詩人や歴史家が言葉の上で泣いたり笑つたりして心の調子を我々に傳へるけれどもさういふ場合には法則も概念も必要ではない。が、さういふものは敘述とは何の關聯もないものである。その要素を明かにして過程を規定することとは何の關係もないものである。それで、個別的なるものが實際敘述される場合には概念も法則もまた關聯を付けることも缺けてはならない。これは歴史家の場合であつても同じことである。グインデルバントやリッカートは個別的なるものに於てのみ雑多な十分な現實が與へられると考へるから、歴史家は原始的現實性を取扱ふのであるが、個別的なるものを法則の見地の下に考察する自然研究者及び心理學者は抽象の世界に活動するといふことになる。けれどもさういふ反對は個別的過程と法則といふ反對とは關係のないものである。といふのは、客觀化された個別的なるものは既に普遍的なるものと同じやうに非現實的なるものである。

るし、さうしてまた法則によつて概念的に規定されたものは直接に直観されたものに劣らず雑多であるからである。ところが、歴史は目的を定め手段を考へて活動する意志する人格の眞の生活のやうに談るものであるが、客観化する科學はさういふ生きてゐる生命を取去つて單なる過程として了ふのである。

それから直観は限りなき雑多を與へるけれども概念は單純化するものであるから概念で以て雑多を描寫することは出來ないといふものがある。が、それにも同意することが出來ない。成程個々の概念は抽象するには相違ないけれども命題となるとまたこれを再建することが出來るのである。惟ふに直観上の雑多は區別の出來る雑多であるから科學的に規定されなければならぬものである。直観によるよりも概念的に區別する方が區別がよく出來るのである。

さて、法則なるものの本質からして、同じ經驗的條件が與へられると如何なる場處に於いてもまた如何なる時に於いても同じ過程の行はるべきことが要求されるのであるが、さういふ關係は經驗條件が特殊化されたにしても同じことである。科學は抽象的なるものになればなるほど法則的實現の條件は普遍化されて來る。

には相違ないが、然し法則の効力はその條件が經驗世界に於いて反覆を許さぬほど特殊化されるにしても原理上同じく普遍的なものである。かういふ意味に於いて我々の太陽系統、地球、我々の社會の發展が客觀化された過程として考へられる時には全く法則の科學に屬するのである。が、我々がこれを主觀化して説明する場合には始めて歴史となるのである。即ち、社會をば自由な主觀の結果と解し、天地を宗教哲學的に説明して始めて歴史となる。それで、一回限りの過程と普遍的過程、事件と法則といふものは反對をなすものではなくして、法則と自由、客觀と主觀とが反對をなしてゐるのである。客觀的過程なるものはよし一回限りの事件と考へられるにしても、また常に反覆する事件と考へられるにしても、原始的現實性を有してゐるものではない。といふのは、主觀から解放されてゐるからである。なほ一步を進めて事象の原始的現實性は全く統一として體驗されるといへる。それで、事象に於ける雜多なるものは第二義的に解されたものであつて客觀化の途中に在るものである。要するに、現實は雜多であるのではなくして我々が現實を捨て、それ自ら法則の支配を受くべき雜多を創造するので始めて雜多とな

るのである。

グインデルバントは、一回限りのものの中に価値が横つてゐる、スピノザのやうに普遍の認識に沈潜する人は感情を失ふと言つてゐるが、価値なるものを現實的な自我の關係に存する価値と解するならば一回限りのものにも法則と同じく価値は存するものではない。といふのは、主観との關係が除去されるからである。

が、価値なるものを心理的感情過程と解するならばいづれにも価値は存してゐるのである。価値の問題を心理學的意味ではなく哲學的に解するならば主観化及び客観化の區別の原理そのものと同じものとなるのである。で、主観化するといふことは主観との關係に於いて現實を考へることである。随つて価値を置くといふことである。ところが、客観化する場合にはそれとは反對になる。随つて価値を離れるといふことになる。それでは歴史なるものは如何なるものであるかといふと對象に關するものではなく主観の行爲に關するところのものである。即ち、意志に關するところのものである。

一體、人間は意欲する主観としては評價するけれども物心的對象としては價值

を離れた世界に價值とは關係なしに立つてゐるのである。それで對象としての人間にはその行爲の動機なるものは原因として勘定されなければならぬけれども意欲する主觀としての人間には意志が目的を達しようとして努力するのである。而してその意志の關聯を明かにしようといふのが歴史の任務であるのである。かくて歴史に於いては因果關聯なるものが問題となるべきものではない。で、若し因果關聯が問題となるやうな場合に於いては歴史的興味は歴史以外の興味に代つたものと言はなくてはならない。随つて歴史に於いて意志の原因を尋ねるといふやうなことは無意味な事であるのである。で、歴史の問ふところは單に意味、目的、意志の內的關聯の疑問に止まるのである。それで歴史の世界は眞に自由の世界であるのである。が、歴史の世界に於いて客觀的事象が消え失せて了ふ譯ではない。而もそれが問題となるのはたゞその本來の實在性に於いてゝある。即ち、意志の手段及び目的としてゝある。例へば此處に二國があつてある土地を争ふとするとその土地は地理學者の記述する土地ではなくして經濟的及び政治的膨脹の手段であるのである。

それから、事象の因果關聯なるものも物的過程として歴史の世界に入つて來るのではなくして人間の興味、人間の智識人間の計算の對象として入つて來るのである。而して自然が地震や洪水によつて文化を亡ぼすといふやうなことがあるとすると、さういふ場合に於いても歴史家の記述するのは何時でも意欲の内容だけである。で、地震や洪水が自然の過程そのものとして歴史の中に入つて來るのではなくして恐怖されたもの若くば活動を止めて了ふものとして歴史の中に入つて來るのである。勿論、歴史家が意志する人間の手段や目的を敘述しようとする場合には屢自然科学者の概念的系統を利用することはあるには相違ないが、然しそれが歴史の範圍に入るやうになるのはたゞ意志に關係して説明される場合だけに限られるのである。シイザアの乗つた小舟は造船家の見地から敘述することも出來やうけれども、その歴史的な意味はたゞこれが水を渡らうといふシイザアの意志を満足させることの出來たところに存してゐるのである。

惟ふに歴史と自然科学とは決して衝突するものではない。といふのは、各異つた次元の中に動いてゐるものであるからである。で、自然科学的な解答を與へた

からといつて決して眞に歴史的な疑問の解答たることは出来ない。これ事象の關係を斷定したからとて執意の關係に對する要求を満足させることの出来ない^(五)のによるのであると。

(註) Münsterberg, Grundzüge der Psychologie, S. 104—138, und Philosophie der Werte, S. 147—173.

五

以上ミュンスタアベルヒの歴史的な存在、歴史的現實に對する見解には首肯せられるふしが尠くないやうに思ふ。とにかく歴史的な存在、歴史的現實なるものは一般に考へられてゐるやうに一回限りの特殊な個別的な事件の因果關聯ではなくして、ミュンスタアベルヒの主張してゐるやうに目的關聯であるのである。生きた生命の流れであるのである。然るを一回限りの特殊な個別的な事件の因果關聯と見ることになる。生きた歴史的な生命を殺して了つてこれを對象化して了ふといふことになるのである。ミュンスタアベルヒがそれを客觀化する見地に立つてゐるものとなしてゐるのは尤なことと謂はなければならぬ。それで、生きた

生命の流たる歴史的存在、歴史的现实を客観化し對象化して見る場合には一回限りの特殊な個別的なものとして現はれて來るのである。而もこれ生きた生命流動の結果に他ならない。而して從來の歴史的考察の多くはさういふ結果の間に因果關聯を覓めようとしたのである。が、それでは生きた生命の流たる歴史的存在、歴史的现实をあるがまゝに把握したものと云ふことは出來ない。

惟ふに歴史的存在、歴史的现实なるものはミユンスタアベルヒの言つてゐるやうに、目的關聯であつて、その根柢には一貫せる精神生活が流れてゐるのである。それで、リツカアの言ふやうに歴史上の事件は普遍妥當的價値に關係を有するものであるから特殊な一回限りのものであると同時に普遍なるものであるのではなくして、その事件は一貫せる精神生活の流れの結果であるから特殊にして而も同時に普遍であるのである。かくて歴史には各系統があると言はれ得るのである。即ち、我が國の歴史は我が國の歴史として自ら一系統をなし、支那の歴史は支那の歴史としてまた自ら一系統をなしてゐるのである。決して一回限りの特殊な個別的な事件の單なる集積ではないのである。

さて、歴史的存在、歴史的現實なるものは既に説いたやうに目的關聯であるから歴史上の事件は一に動機によつて定まるものと言はなくてはならぬ。それはミユンスタアペルヒの説明するところによつても明かであるが、そこで問題となつて來るのは、その動機なるものは何に由來するかといふことである。

これに就いて二つの反對した見解が存してゐると言へる。といふのは、一つは歴史を動す動機なるものは偉人とか英雄とかいふ個人に由來するものとなすものであつて、今一つは全體精神に由來するものとなすものである。素より偉人英雄の歴史を形成する力の大なることは言ふまでもないことであるが、さりとて偉人英雄を以つて全體精神と何等關係のないものとなすことは出來ない。といふのは偉人英雄といへども全體精神から生み出されたものであるばかりでなく、時代精神の風潮に乗るのでなければ偉大な事業を成遂げることの到底出來るものではないからである。これ偉人英雄も時代の子であると言はれる所以である。この意味に於いて彼等も全體精神の代表者であるに他ならないのである。けれども彼等は決して時代精神の風潮のまゝに動かされる傀儡ではないものである。

それで偉人英雄もその動機に於いて一面全體精神によつて規定されてゐるが、また一面個性に基づく独自の活動をなすものと言はなくてはならない。此處に歴史に於ける必然と自由の關係が存してゐるといへるのである。

偉人英雄はもとよりあらゆるものがその動機に於いて常に一義的に全體精神によつてどこまでも規定されるものとするとは歴史に於いて新たな創造なるものは全く見ることが出来ないことにならう。随つて、歴史に於いて進歩發展は全くあり得ないといふことにならう。が、さういふやうに全と個との關係を見るといふことは全く機械的な見方であつて、生きた歴史的生命をあるがまゝに把握したものとといふことは出来ない。個はもとより全によつて規定されてゐる而も個性に基づく独自の活動をなすことが出来るのである。それで、歴史的存在、歴史的現實に於いては全體精神が當に個人の精神を規定するに相違ない、而もなほ一面に於いては自由であるのである。必然と自由とは同時に存在してゐる。これが歴史的生命の特徴である。

随つて歴史に於いては運命シツクザアルの支配を遁れることが出来ないのである。かくて、

例へば我々日本人は我が歴史的発展によつて規定されてゐる以上どこまでも日本人たらざるを得ない筈である。で、我々日本人は支那人たることも出来なければまた歐羅巴人たることも出来ない、いつまでも日本人として残るべきものである。これ運命の然らしめるものであつて奈何ともすべからざるものである。然しそが中に在つてまた自ら各自由な活動をなすことが出来るのである。それで、歴史的進行、歴史的発展の方向は大體運命によつて自ら定まつてゐると言ふもの、而もなほその間に新たな創造が断えず行はれるのである。で、歴史的な生命に於いては必然と自由とは矛盾なく行はれるのである。然るをシュペングラアのやうに各の文化は恰かも植物のやうに發達の一定の段階を経て死滅すべき運命の下に在ると考へるが如きは、歴史的な生命を全く機械的又自然主義的に解したものであつて、歴史を通じて流れてゐる精神生活の本質を會得したものと云ふことが出来ないものである。

歴史は以上述べ來つたやうに目的の關聯であり精神である。されば、歴史の發展が因果的必然的關聯をなしてゐると見ることの出来ないのは言ふを俟たない

ところである。で、歴史的存在、歴史的現實を以て原因結果の關係によつて必然に定まるものとなすものがあれば、それは生きてゐる歴史的命を殺して了つてこれを外的に機械的に解するものと言はなくてはならない。歴史の進展を以て經濟關係によつて必然的に定まるものと見るかの唯物史觀の如きはさういふ見地に立つてゐるものに他ならないのである。歴史に於いて因果關係を究めようとするものは唯物史觀の極端にあらずとするもなほ經濟關係を以て歴史進展の一つの主なる原因と見ようとするのであるが、歴史なるものは決して原因によつて規定されるものではなく、既に説き來つたやうにたゞ動機によつて規定されるに止まるのである。然らば經濟關係なるものは歴史の進展に何等關係するところのないものであるかといふと必ずしもさうではない。

惟ふに經濟關係なるものが歴史の進展の上に尠なからざる影響を及ぼすものなることは一般常識の認めるところであるが、それは強ち理由のないことではない。といふのは、經濟關係なるものが原因となつて、少くとも一つの原因となつて歴史を動かすと見るといふことは生きてゐる歴史の命を殺して了つてこれを

對象化するものであつて、眞に歴史的現實をあるがまゝに把握したものにあらざることには既に説ける通りであるが、而も經濟關係であつても人間の意志の動機に影響する限りに於いて歴史の進展に交渉を有するものなることは否むべからざることであるからである。さりとして經濟關係を以て一義的に人間の意志の動機を決定する力であるものと考へてはならない。といふのは動機的選擇なるものは全く我々の自由に委ねられてゐるからである。我々は決してたゞ經濟關係によつてのみあやつらるゝ傀儡ではないのである。素より我々が實際行動する場合にはニコライ・ハルトマンの言ふやうに、因果聯絡カウザルネキセスを離れる譯には行かないには相違ない。即ち我々の一舉一動は悉く原因結果のつながりであつて、それを離れて行動することは全く許されないことである。而も如何なる因果のつながりを選むかは全く我々の自由であるのである。然るに唯物史觀の立場に立てる人々は我々の意志の動機は一つに經濟關係によつて規定されるものと見ようとする。而して唯物史觀の極端に反對して精神史觀を懷抱すると自稱する人々すらなほ經濟關係を以て歴史進展の重要な原因の一つであると見做さうとするのである。

が、その兩者とも誤つてゐることは言を俟たないところである。とにかく、さういふ誤りの生じて來るのは、歴史的生命を如實に把握し得ないところからであるのは明かである。

惟ふに歴史的生命なるものは客觀的對象の把握に於けるやうに概念によつて把握され得るものではない。素より歴史的生命を敘述しようとする場合には概念の助けを假りてこれを再建するの他はない。といふのは、歴史的生命を敘述しようといふには言語の助けを借らざるを得ないからである。ところで言語なるものの概念の記號なることは何人も知るところであつて説明するまでもないことである。さりとして歴史的生命が概念的思惟によつて把握され得るものと思ふものがあるならば、それは非常な誤りであると言はなければならぬ。

生きた生命は斷えず生々發展するところのものである。歴史的生命もやはりさうであつて、生々發展して已むところないものである。さういふ活きた生命を固定した概念で把握し得ないといふことは既にベルグソンの説いたところであるが、從來人は多く生々發展する流動する歴史的生命を固定した概念で以て把握

しようとした。かくて、歴史の因果的考察が起つて來たのである。而もこれ歴史的生命をあるがまゝに把握するものではなくして、たゞ外的に見たものに他ならないことは既に説いた通りである。

然らば歴史的生命をあるがまゝに把握しようといふに如何にしたらばよいであらうか。此處に歴史的生命把握の根本問題が横つてゐるのである。かのミュンスタアペルヒは自己省察によつて歴史的生命を把握することが出來ると考へたのであるが、たゞ自己省察と言つたゞけでは未だ十分とは言へないやうに思はれる。といふのは、自己省察といふとたゞ主觀的態度を取れといふだけのことを言表すに過ぎないもののやうに思はれるからである。そこで、歴史的生命の把握には如何なる手段方法に依るべきかといふ疑問がまた起つて來るのである。

歴史的存在、歴史的現實なるものは既に繰返し説いたやうに目的關聯であるからして、その生命は、美的鑑賞の場合に於いて所謂感情移入アインフューリシグによつて對象を活かして來ると同じやうに、我々自らの體驗を移入してこれによつて直觀的に把握するの他はない。而して我々自らの體驗の移入される道は歴史上の事件の敘述に

於いて與へられる。そこで、その道を通じて我々自らの體驗はそこに移入せられ、かくてそれを活かして來るのである。随つて歴史的生命なるものは概念の助けによつて描寫され得るものではなくして概念は單に我々自らの體驗の移入される道筋を用意するに過ぎないのである。然るに客觀化し、對象化する立場に立つてゐる人々は一回限りの特殊な個別的な事件の間に因果關聯を付け、而してそれによつて歴史的存在、歴史的現實を十分に把握し得たと信じてゐるのであるが、焉んぞ知らん、これは單に歴史的生命の形骸を捉へたるに過ぎないものであつて、歴史的生命は何時の間にか既に蛻の殻となつて了つてゐるのである。されば因果考察によつては歴史の本質が如實に把握され得るものではないのである。

ペルンハイムは、『歴史』(Geschichte)なる語は、わが獨逸語では起りつゝある事、起つた事、並に起つた事の知識や物語を意味し、且、何ら一定の領域に限り用ゐられるものではない。國家民族の歴史と言ふと等しく、植物や動物や地殼の歴史と言ふことも出来る。實に近世の自然科學は星の輝く大空、即ち宇宙の歴史を大膽に觀察してゐる。然しこの語を特別な學問即ち『史學』に於ける意味で用ゐるならば、そ

れは専ら人の世界に關係ある事件の意である、と謂つてゐるのであるが、成程歴史なるものは起りつゝある事、起つた事を意味してゐるに相違ない。然し『歴史的なるもの』の本質は時間の中に起つた單に一回限りの特殊な個別的な事件を意味してゐるだけのものではない。勿論、歴史上の事件はある時點に始まつたものであるのは言ふまでもないことである。が、然しその事件を單に突發的に偶然その時始めて起り來つたといふやうなものとは見ることの出來ないものである。

尤も一面から之を見ると、歴史上の事件なるものは突發的に偶然起つて來るもののやうに見えないことではない。確に常識には一般にさう思はれる。そこで、世間の歴史家はさういふ事件の起り來つた所謂原因なるものを究めようとするのである。即ち、突發的に偶然起つて來たやうに見える事件であつてもその實決してさうであるのではなくして、それ〴〵の原因があつて起つて來たものと見ようとするのである。で、歴史上の事件なるものは一回限りの特殊な個別的な事件ではあるが、而も因果關係によつて結び付けられてゐるものとするのである。そこで、原因結果の關係とは如何なる關係であるかといふ疑問が起つて來るの

であるが、世間の歴史家はさういふ問題を深く論究せずして、單に『歴史はある一定の領域を因果關聯をつけて認識しなければならない』ものとなすに止まつてゐるのである。で、彼等は恐らく常識的にある歴史上の事件はそれに先だつところの事件によつて必然的に規定されてゐるものだと考へてゐるのであらう。これを例へば珠數玉が各個々別々なものでありながら、而もそれを貫く一筋の絲によつて結び付けられてあるが如きものと見てゐるのではなからうか。すると、歴史上の事件なるものは一回限りの特殊な個別的なるものではあるが、その間に因果關聯と言はれるつながりがあつて結び付けられてゐるものとなしてゐるものと言はなくてはならない。が、その關聯の如何なる性質のものなるかに至つては何等解明するところがないのである。

さて、因果考察なるものは外的考察であつて、生きてゐる歴史的生命を對象化し而してそれに因果の範疇を當嵌めて事件と事件との間に關聯を付けたものに他ならないことは既に説いたところであるが、さういふ因果考察によつて活きた歴史的生命の把握され得るものではない。否、却つてさういふ活きた歴史的生命と

いふ現實が存して居ればこそ外的な因果考察も始めて可能になるのである。

然らば一回限りの特殊な個別的事件であるといはれてゐる歴史上の事件なるものは果してどういふ關聯をなしてゐるものであらうか。生きてゐる歴史的生命の流れといふのは一體何を指して言ふのであらうか。この疑問に答へようといふには歴史に於ける時間なるものを考へて見なくてはならない。

惟ふに、歴史なるものは時間を離れては考へられない。歴史の素材は時間的な發展の事實として把握されるのである。尤もベルンハイムの如きは、歴史を以て協同體をなす存在としていろ／＼活動する人間の空間的・時間的・發展の諸事實をその時々々の協同體から見た價值に關係させた心理的・物質的な因果關聯に就いて究明し、且、敘述する科學であると定義し、而して空間的限定を除外して事實の時間的な『系列配置』だけを採ることは、事實に即する歴史考察にとつては不可能な事として全然斥けられなければならない、となしてゐるのであるが、然しそれは歴史を客觀化し、對象化して把握しようとするところからのことであつて、歴史的・生命を把握しようとする場合には空間的・關係なるものは副次的な條件たるに止まる

のである。

ところで、時間なるものは過、現、未の規定を有するところのものであるが時間の流れは現在の不斷の推移として考へることが出来る。即ち、現在の消え去つた後が過去であり、その未だ實現されない前が未來であるのであるが、その現在は斷へず推し移つて一刻も止まるところがないのである。かの鴨長明は『行く川のながれは絶えずしてしかももとの水にあらずよとみに浮ぶうたかたはかつ消えかつ結びて久しく止まることなし世の中にある人と住家とまたかくの如し、云々』と言つてゐるが、歴史上の事件なるもの果してさういふのであらうか。

なるほど歴史上の事件なるものは一面に於いては確かに一回限りのものであるに相違ない。けれども歴史上の事件に於ける時間關係なるものはまた一面から見るとある意味に於いて過、現、未を超越した『永遠の今』とも言ふことが出来るのである。といふのは、歴史上の事件なるものは正しく一回限りの事件であるにしても、而もなほ之の中には過去が保存せられて居り將來がまたやどされてゐるからである。随つて歴史には一貫した生命が流れて居る。時間的經過を辿りな

がら而もなほある意味に於いてそれを超克するものであるといふことが出来る。「歴史的なるもの」の本質は實に此處に在るのである。然るに世の歴史家はこの事實を無視し、歴史的な生命を殺して了つて歴史を把握しようとする。そこで上來述べ來つたやうな因果的考察なるものも起つて來ることになるのである。

かういふ關係を明かにしようといふには、實際の歴史上の事件を取つて見るに如くはない。今假りに明治維新に於ける皇政復古の如き我が近世史に於ける大事件を取つて見てもその關係が直ちに明かになるであらう。明治維新に於ける皇政復古の如き鴻業の突發的に偶然に起つたものにあらずして、その中には長い準備が壓縮されてゐるのは言ふまでもなく、建武中興はもとより更に溯れば神武創業の精神すら意味されてゐるのである。即ち、明治維新に於ける皇政復古といふ歴史上の大事件には悠久な過去が保存されてゐるのである。さういふやうに悠久な過去が保存されてゐるだけではなく、その後の新日本の發展がまたその中には含まれてゐると言へるのである。また明治維新以來の異質的な外來文化の包容攝取にしてもまたその通りであつて、その中には支那文化、印度文化を包容攝

取した場合に現れたと同じ精神が現れてゐるのである。況んや西洋文化の包容攝取を可能ならしめたものは少くも徳川幕府三百有餘年間の平和の中に漢字によつて養はれた能力なるに於いてをや。して見ると、一回限りの特殊な個別的な歴史上の事件の中には確かに過去が保存せられて居り、同時にまた來るべき發展が意味されてゐるものと言はなくてはならない。

かう考へて來ると、歴史は繰返さないものであると同時にまた繰返すものであるといふことが言はれ得るのである。然るに一方には歴史上の事件なるものを以て一回限りであつて決して繰返すことなきものと考へるものがあるかと思ふとまた一方に於いては歴史は繰返すものと見ようとするものがある。かういふ相反する見解の起つて來るのは『歴史的なるもの』本質を適確に把握し得ざるところからであつて、その兩者とも歴史を外的に機械的に各一面から觀てゐるものと言はなくてはならない。が、然し歴史上の事件なるものは過去を保存してゐると同時に將來をやどしてゐるといつたからとて、それが過去によつて全く規定されてゐると言ふのではない。若し歴史なるものが全く過去によつて規定されて

あるものとする、歴史に於いては新たな創造なるものは存し得ないといふことになる。随つてその経過は無歴史的なるものとなり、實際に於いて、歴史を否定することとならう。それで、歴史なるものは、シユバンが言つてゐるやうに、あつたころのものから完全に説明することの出来ないものと言はなくてはならない。が然し自由がなければ歴史はあり得るものではないのである。

ところで、歴史に於ける自由と人間に動機選擇の自由があるといふこととは關聯してゐることである。といふのは、歴史なるものは究極するところ人間の作爲になる目的關聯に他ならないからである。で、若し人間の行爲の動機が過去によつて一義的に決定されてゐて種々の動機の間選擇の自由の全くないものとなつると、人間は畢竟過去によつて繰られる單なる傀儡に過ぎないものとなつて何等新たなものを作り出すことの出来ないものとならう。すると、歴史は單なる反覆となつて了ふであらう。

然るに人間には種々の動機の間選擇する自由が與へられてゐる。そこで、その目的に随つて新なるものを創造することが出来るのである。が、然し新なるも

のを創造するにしてもその新なるものは過去との關聯を離れて了ふ譯にはゆかない。といふのは、我々はもと／＼全體的な精神から生み出されて來た分支に他ならないものであるからである。惟ふに自由には自ら限界がある。限界のないのは勝手氣儘であつて自由ではない。若し歴史に於ける新なるものが單なる勝手氣儘であるであらうならば、歴史上の事件は何の聯絡もない離れ／＼なものとなつて了ふであらう。かくてその新なるものはヘゲルの表現を用へばピストルから發射されたやうなものとなるであらう。すると、歴史は全く無意味なものとならう。因果關聯すら覺めることの出來ないものとならう。が、歴史上の事實はさういふものではなくして、常に新なる創造であるに相違ない。而もその中には過去が保存されてゐるだけではなく同時にまた將來がやどされてゐるのである。『歴史的なるもの』の本質は實に此處に在るのである。

附記

自分は嘗て歴史哲學に就いて論じたことがあるが、既に十數年前の過去に屬するので、それを補正する意味に於いて再び其の問題を取上げることにした。論文の體裁が舊に依つてゐるのはそれ

哲 學 第十八輯

が爲である。讀者之を諒せよ。筆者。